

議 事 録

会 議 名	第4期寒川町まちづくり推進会議 第3回会議		
開 催 日 時	平成27年1月26日（月）午後2時～3時55分		
開 催 場 所	寒川町役場 東分庁舎2階 第1会議室		
出席者名、欠席者名及び傍聴者数	<p>○出席委員 大川委員(会長)、小川委員、村崎委員、菊地委員、大関委員、右城委員、斉藤委員、山口委員、清田委員(副会長)、浮田委員、森井委員、平本委員、今井委員、小林委員</p> <p>○欠席委員 島村委員、藤井委員、谷村委員</p> <p>○事務局 土屋町民部長、田中協働文化推進課長、伊藤主査、内藤主事</p> <p>○傍聴者数 3名</p>		
議 題	<p>1 各委員会の検討状況等について ①協働PR委員会 ②まちづくりワクワク委員会</p> <p>2 平成27年度の推進会議について</p>		
決 定 事 項	<p>○議事録承認委員は、大関委員、右城委員。</p> <p>○協働のちらしをカラー版で作成する場合における資金の調整については、事務局に一任する。</p> <p>○協働のちらしに対する各委員の意見を参考とし、まとめる。</p> <p>○アンケートは実施をする。</p> <p>○平成27年度の推進会議のスケジュールについては、5月の時点で改めてお示しする。</p> <p>○次回の推進会議は、小林委員の予定と調整しながら各委員へ連絡をする。</p>		
公開又は非公開の別	公 開	非公開の場合その理由（一部非公開の場合を含む）	
議事の経過	<p>（会長）推進会議は、先般2つの委員会に分かれたが、それぞれ委員会を開いていると思うので、中間報告をしていただきたい。また、資料を事前送付しているので、ご意見等あれば今日</p>		

承り、修正する必要があるがあれば対応していきたいと思う。

### 3 議事録承認委員の選出

(田中協働文化推進課長) 議事録は、まちづくり推進会議規則第5条に定められている。これまでは名簿順にお願いをしており、本来であれば大関委員と藤井委員になるが、本日藤井委員が欠席のため、大関委員と右城委員にお願いさせて頂ければと考える。

(大関委員) (右城委員) 了解した。

(田中協働文化推進課長) では、議題に移りたいと思う。ここから議事進行は大川会長にお願いしたい。

### 4 (1) 各委員会の検討状況等について

(大川委員) (1) の各委員会の検討状況等についてだが、まず協働PR委員会からお願いしたい。菊地委員長より、これまでの検討状況および資料の説明をお願いしたい。

(事務局) 説明の前に1つ修正点がある。資料2の、寒川町まちづくりに関するアンケート(案)だが、事前に右城委員より自治基本条例の治の字が治になってしまっているとの指摘があったので、事務局で修正をさせていただく。

#### ①協働PR委員会(資料1-1、1-2、1-3)

(菊地委員) 12月17日に協働PR委員会を開いた。また、1月13日に正副委員長と事務局で打合せをし、資料を作成した。

—資料1-3についての説明(省略)—

意識をしているのは、【協働とは】の文章の中でオリジナリティを作らないといけないので、「ボランティア精神を持って」という文章を取り入れて文章構成をした。資料1-1・1-2については、右城委員から、資料1-3だと例が2つとも団体だったので、個人についても入れてみたらどうかという意見があり、資料を作成した。どちらの方が良いかは、委員会で決めていこうかと思うが、町と相談して、1人の個人を相手に町として対応できるのかという問題点があった。市民活動団体というボランティア団体しか町は対応できないのかという線引きははっきりしないので、整理して個人の人を対象として町は対応できるのか、またそれを謳いこんでしまっているのかということも含めて相談しようと思う。また、資料として配付していないが、ちらしの裏面に「最初の一步」ということを書く予定

。これは、寒川町に対して協力してほしいと呼び掛けをするのはなかなか難しいと思うので、お互いの敷居を低くすることで、町が相談に乗ってくれるとか、気軽に相談出来るボランティア団体というように、お互い相談しやすくなるような仕組みにしていけないといけないので、そういったところを意識して作成していこうと思う。お互い、そんなもの町がやれば良いんだ、町はそんなこと協力できませんというようなスタンスではなく、信頼関係をキャッチフレーズにし、頼り頼られる関係、全部お任せにしない、透明性という意味で効果をはっきりさせるというように、楽しく課題に取り組む姿勢を裏面に解説という形で入れていこうと思う。

(大川会長) 菊地委員長から報告があったが、委員会の中で補足等する所はあるか。

(他委員) なし。

(大川会長) 意見等あればお願いしたい。

(菊地委員) このちらしは、できればあと1回か2回の委員会で推進会議に諮り完成させたいと思う。広報の仕方として、できれば来年度の予算に組んでいただいて、ちらしをカラーで作りたい。配布も、広報さむかわに織り込むことができれば全戸配布も可能だろうし、ホームページに掲載することができるのかは広報担当と相談して取り組んでいきたいと思う。

(事務局) 今、予算の話が出たが、現在平成27年度の予算査定を進めている中では、ちらしのカラー印刷代は要求していない状況なので、事務局の考えとしては、平成28年度の予算に計上するという流れとなる。補正予算等もあるが、これは緊急性のあるものしか通らないので、このちらしを緊急に出さなければいけないというのは理解を得るのが難しいと思う。

(村崎委員) 平成28年度だと、今期の委員の任期は終了している。カラー印刷代は、総額10万円程度なのではないか。

(大川会長) 土屋町民部長、もう査定は終わっているのか。

(土屋町民部長) こういった部分については、すでに終了している。今は、復活要求や町長の保留の関係の査定が半分程度終了している状況。

(村崎委員) 10万円程、何とかならないのか。そういった予算は一万円単位からきちんと決まっているものなのか。

(土屋町民部長) もう少し早い段階であれば、入れ込むことは

出来たかもしれないが、現状としては厳しい。

(右城委員) 各委員が時間を使い、まちづくりをどうするかとみんなで考えてやっていくことがそんなに簡単に平成28年度予算ですと言って良いのか。また、先程菊地委員から意見に、個人として町へ行った時になかなか受け入れてもらえそうにないからグループでとあったが、個人が言ったことを受け入れられない行政だったら、協働をする必要はないのではないかと私は思う。個人が簡単に行って、簡単に受け止めてくれて町を良くするためにどうするかを行政が考え、一緒にやっていこうとするのが本来の協働のあり方なのではないか。

(菊地委員) ちらしを印刷すると費用がかかり難しいということであれば、広報の中にページとしてそのまま入れる方法でも良い。

(小川委員) 平成28年度ということであれば、その時間を前向きに有効に使った方が良いと思う。例えばこれを広報の中に入れてしまうと、すぐに反応があるかもしれないので、広報に入れるまでには役場でも体制を整えて、どの窓口に行けばこの相談が出来ますよとか、公園の砂等お金が必要なので、その予算を確保して何かアクションがあった時に動けるようなシステムを作るところに時間をかける。これを出すからには反応があった時にある程度対応出来るところまでシステム化できたら良いと思う。

(事務局) ちらしの配布だが、先程はカラー印刷に限定して予算の話をさせていただいた。カラー印刷でなければ、例えばだが全戸配布することは検討の余地がある。

(村崎委員) こういうものは、一回出して終わりではないので予算がついた段階でもう一度カラー版を出すという形でも良いと思う。

(事務局) お金が絡んでくる部分なので、広報担当とも協議をしないといけない。

(大川会長) その関係については事務局に一任する。今の説明に関して意見はあるか。

(村崎委員) 右城委員から個人の話が通らなければ協働をする必要がないのではないかという意見があったが、一人の意見と考えるとそれに反対する人も居ると思う。個人ではなくある程度の仲間というか、グループ等を協働のパートナーとしては良

いのではないかと思う。個人をどう定義するかによって随分違ってくると思うが、あまり個人を前に出す必要はないのではないかと思う。

(大川会長) 組織ではなく、気の合った仲間2～3人等のグループという考え方で良いか。

(村崎委員) はい、私はそういう意見。

(大川会長) 菊地委員、どうか。

(菊地委員) 砂の例にあるように、砂が足りないから持って来てくれとなった時に、本当に撒いてくれたかどうかを町の職員が確認に行くとなると逆にお金や手間がかかり、信頼関係も壊れてしまうかもしれないという心配もある。お金も絡んでくるので、出来れば一緒にやる仲間や団体の方が良いのかと思う。八王子市や伊勢原市等の資料を見ると、市と協働するパートナーは市民活動団体で個人とは謳っていない。ある程度の自治体の規模から考えると、やはりそれは仕方が無いのかと思う。右城委員の意見もとても大切だと思うし、将来的にはそういう方向に行かないといけないと私も思うが、今の時点で対応出来るとなると、寒川町の規模では市民活動団体に限ってしまった方が良いのかもしれない。

(大川会長) 小林委員いかがか。

(小林委員) 先程、予算10万円の話があったが、行政の制度下であれば出来ない。全部合意を取って、税金で物事をやるというのはそういうこと。住民の協働の感覚で今すぐ解決しようと思っても、それが出来ない。それが日本の制度の決定的な問題。一般の自治体で行われている協働事業は、自治体により団体・個人のどちらのタイプもある。あるいは、2人以上といった制限をかけている所もある。それから協働事業として提案して、審査があって予算組みがあって、その予算は翌年になるので、大体2年後にやっと事業として動いてくる制度。これも行政の枠組みの中に入ってしまったということ。今、そうした枠組みが限界に達しているというのが現状。せっかくこういう活動をやってくたさるのであれば、本来はこれに対して自由に使えるお金、要するに行政のプロセスを経ずに、住民協議で使えるお金が行政側から確保されていれば、例えば推進会議が審議をしながら情報を公開して、こういったものに使いましたという制度にしておけば信頼性も確保出来る。数十万円で

も良いので、そういうお金が確保してあって、それをこの推進会議で議論して、結果はアウトプットして出すといったような制度を少し組み込んでおくと今のような問題にすぐに対応出来て住民の感覚の協働になると思う。行政のフィルターを通過して、行政の事業としてやる協働というのは、私の考えでは協働ではないと思っている。本来は住民だけでやればもっと上手くいくかもしれないが、行政の事業とってしまっている。今、協働の事業はもう1ステップ住民の活動に柔軟に合わせた事業が出来るようになっていけば良いと思う。今のような議論があれば、小川委員の意見をこの推進会議のアウトプットとしてそういう制度を作るべきだという方向性を出しておくことが重要だと思う。今議論されていたことが、日本の協働事業の問題点。

(大川会長) まちづくりワクワク委員会の各委員から意見はあるか。

(山口委員) 協働とはという説明の中で、ボランティアに関することも書いてあるが、ボランティアという言葉を抑えると、ある意味個からの動きなのではないかという感じが個人的にはする。そうすると、市民活動団体等が入る前に個がこういう団体やグループに入れるようなシステムを取り入れてもらって、それで全体的な動きが出来る様に持って行った方が良いと思う。最初から個人はなしとする必要はないし、それだったらここでボランティア精神と謳わない方が良いと思う。

(菊地委員) このちらしは、どちらかと言うと町民の意識を変えるのが目的だと思う。事務局から、これから人口が減少して役所の職員の人数も減っていく中で、少なくなってしまったからと言って、協働が必要だと言っても遅いので、今のうちから意識を持っていただいて、そうなった時の準備をするという役割で協働を広めなければいけないという話があった。そういう意味では、ボランティア精神は少し大げさなような気がするが、当たり前なんだということのを植え付けたいのと、そういうものを持って社会に貢献し、生活していくという目的であえて入れている。ここに個人と書かなくても、意識ということであれば特に私は問題ないと思う。違和感があるようであれば文章を見直すが入れたいフレーズである。

(小林委員) 個人なのか、団体なのかという問題は、例えばア

アイデアが浮かんだ時に個人で始まることを前提にする制度もある。また、個人でアイデアを出しても事業自体は何人以上や、予算額に応じて例えば1万円につき一人、100万円なら100人以上でその事業に取り組まないといけないという制限をつけるものもある。菊地委員が言ったボランティア精神は、自発的な精神でという意味だと思う。

(菊地委員) 個人を配慮したいということではない。

(山口委員) ボランティアはどういうことかわからない部分があると思うので、ボランティアの意識付けをプラスαでこの中で呼び掛けてもらえるのであれば全然問題は無い。以前、ドイツやフランスに行った時に市民が当たり前のように一人一人で行動出来ていて、日本とのギャップをととても感じた。そういう風に自主的に誰もが動ける環境がまず作れたら素晴らしい。

(菊地委員) ボランティア精神を浸透させるという表現に変えたらどうか。

(大関委員) 例として、団体が記載されているが、一般の人からすると、自分には関係のない話としか思わないので、個人として一対一では難しいが、数人、要するに砂場の周りに集まった何家族の代表の方が行政に行ってできますよというような意味合いのちらしの方が良いと思う。団体になると、入っていない限り何も意見を言わないし、協働って何、私関係ないわで終わってしまうと思う。そういう所がもう少しわかれば良いと思う。基本的に行政は、最初からこれは無理だよと言うことが多いが、無理だったら最初から委員会をやる必要はない。無理なことを現実にするのが委員会であって、そこを上手く調整していけば良いのではないかと思う。

(菊地委員) 実は、資料1-3の行政主体の方の2コマ目に個人の人にもお声かけしてみましようという意味で「広報でも募集してみましよう」と最近追加したが、弱いか。

(右城委員) そこまで読み取れない。団体でないとはとなく自分の思ったことが進んでいかないというのは違うと思う。やはり意を同じくする人達が共にそういう意思表示をした時に受け止めてくれるような体制でないといけない。先程、個人で砂を公園に入れるとなるとそれが個人宅へ持ち帰ってしまうのではないかという話があったが、そういう発想でいたら、個人から発想は何も出てこないと思う。インチキしたらしたでした

人がやはりやらなきゃ良かったと思うような環境に作っていかない。

(小川委員) 実際にあった話を聞いたのだが、公園の緑道付近にお住まいのお年寄りの方が居て、緑道のいちょうが全部落ちるとすごいことになり、近所の方々の労力の出し方は大変なものになる。それでも、お年寄りの方々は自分の家の近くにこんないっぱい枯れ葉があったら何もしないと思われるのも嫌なので、相当量の枯れ葉をかき集めている。その時に役場に労力を出しますので袋を少しいただけると有り難いですと言ったら、その時の役場の方の対応は、ある方は1袋だけぼんと置いて、もうひとかたは何袋か持ってきてすいません、よろしくお願ひしますと声を掛けてくれたらしい。1枚や2枚はご自宅で使ってしまふかもしれないが、そんなことは疑わずに何袋か持ってきて、お願ひしますと言ってくれたのがすごく気持ちよかったですし、何袋か置いていってくれたというのは、信用してくれているということで、すごく有り難かったという。その時も、1軒だけで言うのは言い辛かったので、ご近所の方達みんなで行った。実際にそういったことはやっていることなので、あえて敷居を高く協働と言わなくても、本当に普通に町の中にあるのかと思う。

(小林委員) 問題を拾っていくというのも、住民の役割としてはとても大事だと思う。お金がゴミ袋にかかってしまうので、例えば落ち葉だけは透明の袋に入れておけば、そのまま無料で回収するという制度に行政が変えてもらえれば皆が安心して落ち葉だけは出せるようになる。意見を吸い上げて出していけるというのは、とても重要な制度設計の一つだと思う。そういうことを実践している自治体も結構ある。

(土屋町民部長) 今寒川は、そういう制度になっている。

(大川会長) 皆さんに色々意見をいただいたので、それを参考にまとめて進めていただきたいと思います。

(菊地委員) わかりました。

## ②まちづくりワクワク委員会 (資料2)

(大川会長) それでは次に、まちづくりワクワク委員会に移りたいと思う。山口委員長より、これまでの検討状況や資料の説明をお願いしたい。必要があれば事務局からも発言をいただき各委員についても、意見等あれば発言していただきたいと思います。

う。

(山口委員) 12月18日に委員会を開き、意見聴取をした。その中で出て来た意見は、町民の町政への参加は出来ているが参画はあまり出来ていないという課題があるのではないかという意見と、熟年パワーの部分は社会福祉協議会と結構個人的に活動されているし、あるいはボランティアもある。町のホームページを見ると社会福祉協議会とか地域包括支援センターとか、ボランティアセンターやボランティア団体、こういうような団体等の活動を見ていくと、熟年パワーで前期提案があった各活動については、この辺の方がやっている部分があるのではないかという意見もあった。また、第3期推進会議の報告に対する検証は、第4期でもやっていかないといけないという意見があり、その意見の反映状況を見ていきながら、推進することなどを念頭に活動をしたらいのではないかということや、各活動、ポイント制というのも町で今後検討していく課題になっているので、女性の活躍の場の研究部会の提案をメインにやっていきたいという意見があった。その中で、女性の参加を進めるための意識啓発という中で、若い世代の意見を聞いた方が良いのではないか、今まで年配の方の意見は聞いているが、子育て世代の生の声はなかなか聞いていないのではないかということで、協働を進めるにあたってはこれからの町の担い手である若い世代、あるいはお子さんをお持ちの方々はどういう要望があるのかを聞く必要があるのではないかということで、今回さむかわのまちづくりに関するアンケート調査をするということで委員会を進めていくことになった。

－アンケートの説明(省略)－

日程的には、今日この内容で審議して頂いて、内容の追記等をして再度承認がとれたら、教育委員会へ話して、校長会へ協力の依頼に行き、承認が取れたら、PTA連絡協議会の会長へ協力依頼をし、今のPTA役員の任期である4月中にアンケート発送・回収できればと思っている。

(大川会長) 事務局から補足等あるか。

(事務局) まちづくり推進会議会長名でアンケートを出す案となっているので、各委員の承諾を得なければいけないと思っている。内容については今後また委員会でたたいていく。今お示ししているのは、事務局と委員会で調整した内容で、委員会と

して完全に洗練された形ではないということをご承知いただきたい。

(大川会長) 設問が19あるので、ご確認いただき、ご意見があればお願いしたい。

(村崎委員) 結構ボリュームのあるアンケートなので、このアンケートをすることによって何を導きたいのか。アンケートを集計した結果は例えばこういう結果になる可能性があるのではないとか等、意図しているところは。

(右城委員) 私は非常に良いと思う。若い人達が今寒川に住んでいて、何を考えているのかというのを今まで多分チェックされたことはないと思うので、そういう実態がこのアンケートで少しわかるのではないかなと思う。質問だが、1人の生徒に何枚アンケートを配るのか。ひとり親の場合は1枚が良いが、父親は何を考え、母親は何を考えというのを絶対にとってほしい。父親は外に出て働いているから、父親と母親の考えていることはかなり違うのではないかなと思う。そういうものをこのアンケートをとり、知ることによって今後、行政・地域住民は何をしていくかということの1つのきっかけ、導入部分になるのではないかなと思う。また、アンケートを配る時は学校の先生に協力してもらおうと思うが、学校の先生に、このアンケートを行う趣旨を本当にわかってもらうまで話してもらおう。今の若い人達がどう考えているかを知りたいから、子ども達にきちんと保護者の方に答えてもらってくださいということを説明できるところまで先生に納得してもらってからこのアンケートをしてほしい。結果についてどうこうという予測ではなく、まだ何を考えているかわからないというのが現状。

(小川委員) 両親が居る子どもには2枚配るというのはやめていただきたい。こういう会議では若い母親の考えていることはわからないかもしれないが、PTAでは問題が出た場合は、きちんと取り上げてPTA連絡協議会は8校が全部手を取り合い年に1回の懇談会や教育委員会に来ていただいて、今の問題点について取り上げて毎年話し合っているの、大体今の子育て世代の問題点はPTAでは把握しているので、聞いて頂ければ。1軒1軒出さなくても良いと思う。

(右城委員) そういう所に出て行く方には、何を言っても理解してもらえない。理解しない人は出てこないのではないかな。アン

ケートを保護者にとるというのはそういう人の意見もとると  
いうこと。

(小川委員) アンケートを出さないのではないかと思う。

(右城委員) 出すか出さないかはやってみないとわからない。

(小川委員) 学校が出した手紙を子どもが家に持って帰るもの  
は4割届かない。

(右城委員) どうなるかわからないからやるのに、そんなこと  
を言っでは、アンケートをやる意味がない。

(山口委員) 委員会の中でもこういう目的でアンケートをやっ  
て、結果こういう方向に持って行こうというアンケートはやめ  
ようと言った。本音で聞きたい部分を聞いていかないと、上辺  
の良いことばかり毎年やっても仕方が無い。意見が出てこ  
ない所の問題点を抽出していかないと、本来の協働が生きてい  
かないのではないか。本当はこんな「はい、いいえ」「1番、  
2番」と選ぶのではなく、“だから嫌なんだよ”という生の  
声を聞けるようなアンケートにしたいという思いがある。上の  
人の意見ばかりで協働づくりをやっていこうとしても、若い人  
のやっていこうという意思を持っていかないと町は活性化し  
ない。

(小川委員) 家庭に配るのは良いと思うが、親の人数で配布す  
るといのはどうなのか。

(大関委員) 両方に聞きたいのであれば、中の内容的にきちん  
と書いていただいてそこで、どちらかと言うと男の人に書いて  
もらわないといけない問題なのか、そういうような質問でな  
いと教育委員会では通らないと思う。家庭に2部配るとい  
うのは教育委員会でも反対が出るとし、現実味としてはない  
と思う。どういった時でも、ご両親という言葉を使ってはいけ  
ない世の中なので、保護者様という形になっていると思う。あく  
までひとり親が多い中、保護者が1人しか居ないお子さんに傷  
を付けない方向で進んでいくのが、教育委員会の考えなので、  
そのところは考えていただきたいと思う。

(山口委員) その前に、まずこのアンケートを実施しても良い  
か、この推進会議で承認を得ていない。だめだということであ  
れば白紙に戻さないといけないのだが、いかがか。

(大川会長) 手順としてどう進めていく予定なのか。

(山口委員) アンケートについて承認されるのであれば、内容

の問題点を提議していただき、修正し、再度各委員へフィードバックした後、承認が取れて初めてスタートしていくと思う。時期的には一番良いチャンスが今のPTAの役員が居る時、また、4月は新学年になった時に学校からの配布物が多いので親御さんは、学校からのたよりを見てくれるのではないかという委員の意見もあったので、日程的に間に合えばそこに持っていきたいと思う。

(清田副会長) 山口委員としては、今年の4月に配布をしたいというイメージか。

(山口委員) はい。

(清田副会長) タイムスケジュール的にはかなり厳しい。

(村崎委員) この場で決定しないと、進めない。

(清田副会長) ましてや、校長会は何ヶ月に1回しかやっていない。

(山口委員) 委員会の中では、事務局とも話して、2月中に教育委員会や校長会、PTA連絡協議会に説明をして協力の承諾が取れた上で、3月末に印刷して4月に発送、4月末に回収したいという意見だった。

(右城委員) 父親が居ない所に2枚配ると言っているわけではない。保護者は、両親を保護者と言っているわけではなく、それぞれが保護者。例えばこの設問を見ても自治会や子ども会、婦人会とあるが、父親と母親が違う団体に活動している場合、全部違う答えになるはず。そういう設問をしているのであれば父親は地域のことには携わっていないけれど母親は携わっている。つまり、記名式ではないから、誰がどういうことをやっているかはわからない。答えてくれた数の中の女性、男性はこういう風に答えています、20代、30代はこう答えていますとなればもっと浮き彫りになる。それを父親が全部いいえで回答したら、地域の人は何も考えてやっていないみたいに見えてしまうということもある。母親しか居なかったら1枚持っていけば良い。家へ帰るまではこの子が1枚でこの子は2枚でというのはわからない。そんなにこだわることなのか。それぞれがやっていることが違うのに、それを1つの家庭でアンケートをまとめること自体がもっとやる意味がなくなってしまうのではないかと思う。

<設問内容に対する右城委員の意見>

- 設問 1 3 : 小谷で言うと安全パトロールや子どもの見守り隊に参加していますという方が居るので、防犯組織を入れたらどうか。
- 設問 1 4 : 地域と関わり合いを持つのが面倒だから、無償で時間を使うのはもったいない等を入れると、本音が出てくるのではないかと思う。
- 設問 1 6 : ずっと住んでほしいなど書いてあるが、出来れば他に移住したい等も入っていて良いのではないか。
- 設問 1 7 : 交通機関の利便性を高くしてほしい等。例えばコミュニティバスなんかの運行も含めてそういう要望があったら書いてあっても良いのではないか。
- (大川会長) まだ意見をいただくか、まずこのアンケートを実施するかしないかを決めないといけない。アンケートの実施について意見をあれば発言をお願いしたい。
- (菊地委員) 村崎委員と同じで、これを踏まえて何をやるかだと思う。これをやった結果は、正直なんとなくわかった上で企画していかないとアンケートをとって来年度終わってしまうかもしれないので、仮説を立ててやっていかないと無理だと思う。その準備次第でアンケートをやっても良いと思うし、やらないで進むべきとも思っている。アンケートをとってかなりの数を集計してそれを元に必要なものをピックアップしてという作業はとても難しい。そこからまた何か始めるとなると、完全に間に合わないと思う。女性に絞ったのであれば父親の意見はいらぬはず。女性の子育て世代だけのアンケートだけでもかなりボリュームあり、大変。
- (平本委員) まちづくりは、ずっと引き継いでいっていると思うので、答えが出てまた次期に引き継いでもらえれば良いのではないかと思う。
- (小川委員) P T A 連絡協議会は 2 月くらいが最後の会議で、次は 5 月の新旧の引き継ぎになってしまう。会長が独断でこれを出しますとは言えないので、臨時で会議を開いていただいたり、会長会に行って説明する等の手間も出て来てしまう。
- (山口委員) 今、一案でだめならもう一回時期をずらして実施するという意見は委員会の中で出ていた。前期、熟年パワーの中でも最初のスタートは、学童保育とかその辺の子ども達に目線を向けた行政の今の対応とか状況報告をしていただい

た。学童保育というのは、結局国の方針で運用する先生方が有資格者でないといけないとか色々と制限があって、それを先程菊地委員が言ったように、日本全体が少子高齢化になっていく中で熟年を活かそうというところとちょっと歯車が合わない部分が見えてきた。というところで、行政がどうやって資格者を認定していくかという部分も見えない中で、学童保育に絞った熟年パワーの活用は難しいということになった。具体的にこういうことをやってほしいという内容があったが、若い世代の人達も具体的な提案があれば熟年パワー前期との活動をミックスする部分があれば1つでもその活動を具体化したいという部分はある。

(小川委員) 最初は1つの推進会議で、マニュアル作成委員会と、まちづくりワクワク委員会に分かれて始まったが、今は別の方向に行ってしまう気がする。実際にやりましょうというところはアンケートを取って幅広く考えて何が必要か考えていきましょうということで、こちらは私達の任期の間に実例を作ってモデルとなることをやっていきたいという趣旨で分かれたと思うのでそこが、すごく時間がかかってしまうのとこちらが実際に活動できるようにしていこうというところとだんだん溝が広がってしまっているような気がする。学童は学童の方でも会があり、問題も話し合っている。

(山口委員) 学童やPTA等のエリアの中での問題点は抽出できていると思うが、協働をつくっている中での部分活動は色々な考えを元にした中で参加できるような形をシステムとして作っていかないといけないと思う。

(斉藤委員) 小川委員が言った、委員会の活動がそれぞれ離れていってしまうというのは、基本的にそれで良いと思う。平成19年に推進会議が開かれたが未だに知名度は高まっていないので、いかに早く理解してもらうか、知ってもらうかが一つのPRとして非常に大事なこと。1年で何をやったかではなくある意味ではそういうことを早急に知ってもらう手段としてこういうものをやろうということで作り上げてきた。これはこれで素晴らしいことだと思う。もうひとつは、地域活動の中で若い人が参加しにくく、失礼なことかもしれないが、親にならない親が親になっているところが現実的にあるのかもしれない。学校で配って4割しか答えてくれないということ自体が問

題だが、現実としてそういう状況ということも、逆に検証する必要があるのではないか。検証することにより、今の親達が何をしようとしているのかが見える。現実に関、色んな地域社会をやるために、単発でこういう風に調べることによってそこで出てくる答えや内容をさらにそこで分析する。アンケートは1つの方向性を導く、こういう風にしたいからという導くアンケートがあれば現状と、またその中で何を言いたいのか、そこから見いだしてくるものがある。その年数が単年度であろうが、単年度で終わらないとしても若い世代に絞り込んでいくという1つの手段としてはこれからのまちづくりにとって非常に大事な部分である。どっちに導くとか導かないとかその傾向から何を模索していくのかということを入れれば、より深めていくという部分では、このアンケートは絶対必要だと思う。今年度で決まれば素晴らしい、決めなければいけないんだという観点でやるということに疑問を持つ。

(小川委員) 4割家庭に届かないというのは、家庭のせいではなく子どもの机の中に入れてままだになってしまうということ。

(右城委員) それは先生がどう言っているかということもある。子どもだけの責任ではないかもしれない。やり方が悪いのであれば、やり方を変えなければいけない。そういうことから現状認識がはっきりクローズアップされて、改善策が出てくる。4割しか出てこないからやっても仕方ないと言うなら何もやるものがなくなってしまう。20代30代を対象にしてやるのは初めてだと思うが、これは画期的なこと。誰も分からない。若い人達の思考回路は不明なので、その中の少しでもこういうものでわかれば今後の何かに活用できる。そういう意味で私はこのアンケートは絶対やるべきだと思う。

(小林委員) アンケートなどで寒川町の現状をきちんと把握するのは大事なことだと思う。闇雲にやっても違いもきちんと出ないこともある。今の議論を聞いていると、1つは若年・女性の考え方が知りたいということ、もう1つは寒川町と他の自治体、一般的な自治体のまちづくりへの参加意識と、この町がどうなのかということ全般に知りたいということだったと思う。まず町についてだが、普通、行政は町民意識調査というものを過去に随分とやっているのではないかと思うが、そうしたアンケートの内容・結果とこのアンケートの内容が重複する

ようなことがあれば、排除するべきかもしれないし、あるいは追加して対象者を変えてそれを比較するといったようなことが重要だと思うので、やはり行政側から過去の調査結果などを皆さんに提示しなかなかなか何を対象にやるべきかという議論ができないのかと思う。平成16年～平成19年にかけて国民生活白書というのがあり、その中でこういったまちづくりのアンケートをとっている。それを平均像とすれば、みなさんがやろうとしているこのアンケートの内容と比較しながらやれば非常にその対象がわかってそれと寒川町の人がどう違って何を考えているのかわかると思う。全国一般にやったアンケートをベースに寒川町でアンケートを実施するというやり方もあると思う。今、国民生活白書はなくなってしまったが、インターネット上で公開されているので、どなたでも見ることができるので、事務局からそうした情報を提供すればやりやすいと思う。この内容と非常に類似している。

<設問内容に対する小林委員の意見>

- 設問1：年齢については高齢の保護者の方も居るので60、70、80代も入れた方がよい。
  - 設問2：知っているではなく、すごく良く知っている、全く知らないというように5段階にすると、スムーズに集計しやすい。
  - 設問3：知っているか知らないかだけではなく、出したか出さないかという2つの問いかけが入ってしまうので、それぞれ分けて2つの設問にすると、スムーズに集計しやすい。
- 集計については、町民意識調査等の中でこういう設問を組み込んだり、どこかの課でアンケートの予定があればそういう調査を実施したり、PTA等の団体に乘っかり一緒にやるとか、集計はととても大変なので、そういった手間を考えないと。動きそのような調査があれば、そういったものに組み込む方が、集計作業も楽だし良いのかと思う。あと、若い世代であればネットで回答をしてもらうということであればそのまま集計も進んでいくだろうから、寒川町にそういうシステムがあればそれを使うのも手かと思う。手法や対象について定まらないところがあるので、少し時間が必要な気がするがその時間を空けて実施するのであればすごく良い内容のアンケートだと思うので、実施する方向で議論されると良いと思う。

(大川会長) 何か他に意見等はあるか。

(田中協働文化推進課長) 住民のアンケートは町でも実施しているのですが、その辺のすり合わせはしていきたいと思っている。今回のように小中学校の保護者対象に世代を限定しているものは、多分やっていないのではないかと思います。

(小林委員) 町民の調査であれば、例えば各世代で男女フェイスシートをきちんととるので、フェイスシートから逆に割り出していくということができる。20代、30代、40代、50代の女性でどういう構成になったという風に。ある程度の量があれば、別に対象を絞らなくても町民の調査に組み込めば多分その結果は出すことができると思う。

(田中協働文化推進課長) 小林委員の意見のようにできればと思うが、時間的に2月に校長会とPTAに出すとなるとかなりタイトになるが、こういうアンケートを若い世代に出すことはあまりないので、思わぬ結果が出てくると思う。出し方の手法というのは、校長会に絶対出すということであればそういう形だし町民アンケートということであれば、担当課に確認をして内容的にのせられるものであれば、のせた中で分析をしていくことになると思う。

(山口委員) 時間的にタイトで、無理してやる必要はないということはあるが、ここで最初のスケジュールを逃してしまうと少し後になってしまうという感じはある。どちらにしても、皆さんのご意見を聞いて審議会として、アンケートのやり方と手法も方向性としては1つの活動に持って行きたいという中の1つのアンケートでカテゴリーを分けた中の情報が欲しいというところだけだったので、この辺をもう少し揉んでいただいて、審議会ですべて了解を得られないと勝手に委員会でやることはないと思うので。

(斉藤委員) 委員会で1番問題になったのは、実施の時期。PTAの場合は、役員会が5月。

(小川委員) 5月は新旧で引き継ぎをする。

(斉藤委員) 6月になると色々行事があり、その後は夏休みに入り、9月は体育祭で5月～秋口というのは行事が多くある。

(小川委員) 通学路の危険箇所の洗い出しまでやらないといけない。

(今井委員) 期間的に厳しいということを理解した上で今のP

TAの役員さんが居るこの時期が一番ベター。学校側の年間計画からいうと、この時期を外すと非常に難しい。また、過去にこういったアンケートをとったことはないと思うので、そういう意味では、このアンケートをやる価値はとてもあると思うので、ぜひやってほしいと思う。まだ教育委員会でも話していないのであればそういったことを進めていかないと、結局教育委員会でだめになってしまったりする。とりあえずそんなに反対する人は居ないので、もうここで決めて動いてしまった方が良くと思う。私も何かの事業でちらしの配布は教育委員会がやってくれたが、回収までとなると本当に全員回収しないといけいいのか等の詰めもあるので、回収の時に1割、2割しか返ってこなくても、それが資料になるので、それはそれで良いと思うのでやる方で進んで動いてほしいと思う。配布するときには、協働PR委員会のちらしも一緒に入れて配布しないと、協働が何かをこれだけではわからないと思う。とてもわかりやすい資料を作っているので、ぜひ同封して欲しいと思う。進めていかない限りはできないと思う。

(事務局) 教育委員会の部分については、今回委員会でのアンケート作成について担当同士では話はしている。まだ具体的にどのタイミングで実施するかはこの会議で承認を得る必要があったため、詰めきれてはいないが、教育委員会を通じて学校にアンケートを実施している例は他にもあるので、相談に乗ることはできるという状況。

(小林委員) 事務局に苦言になってしまうが、皆さんはまちづくり推進会議の委員ということで条例に位置付けられてここに居る。行政と住民の活動の一番重要なコンタクトポイントであり、その皆さんでアイディアを出してアンケートの案も作成して、これを住民の活動だからそのままにしないで、各委員会で議論している時に実施の可能性について、それこそ協働のまちづくりをやっているわけだから、各部署との調整やアンケート内容の妥当性等は、行政として相当に協力をしてチェックを入れていかないと。決議する場所に上がってくる資料の完成度、住民の方も仕事でやっているわけではないので事務局でそのレベルまで上げておいて、会長名で実施できるようにフォローしないと、また次その次になってしまう。行政の事務局もかなり積極的にそういう内容にアクセスしないと進ま

ないのではないかと思います。この場こそが協働の場だと思うのでぜひそういう姿勢で進めていただけると良いと思う。

(大川会長) スケジュールが大変のようだが、実施をするということではよろしいか。

(各委員) 異議なし。

(大川会長) 内容については、議論をしていただいたが、他に付け加えてもらいたいもの等あれば発言をお願いしたい。

(大関委員) 先生に協力をいただかないといけないので、アンケートをとるにあたって、どうしてアンケートをとるのかというメッセージのようなものが必要。そうすることによって、会議が通っていく。だからこそアンケートをとりますよという意見をいただければ。そこの部分をきちんとあげていただきたいと思う。

(大川会長) 他にあるか。意見ないようなので次に平成27年度の推進会議について事務局より説明をお願いしたい。

## **(2) 平成27年度の推進会議について (資料3)**

(事務局) -資料3説明省略-

5月の段階で推進会議で改めてお示しをする。

(大川会長) 推進会議は年3回と決まっていますが、他の委員会等はボランティアでやっていただくことになってしまう。今後作業等が予定されているのでご迷惑をおかけするがよろしくをお願いしたい。スケジュールについてはよろしいか。

(各委員) 異議なし。

(大川会長) 次にその他の説明を事務局よりお願いしたい。

## **5 その他**

(事務局) 次回の5月の推進会議は小林委員の予定も調整しながら各員へ連絡をさせていただきたい。

(大川会長) 皆さん、よろしいか。

(各委員) 異議なし。

(大川会長) ではお返しする。

(田中協働文化推進課長) 長時間にわたりお疲れさまでした。清田副会長より閉会の言葉をお願いしたい。

(清田副会長) 推進会議は、寒川の要の委員会と位置付けている

ので、事務局も一生懸命頑張ってもらい、少しでも実現できるような方向でご努力いただきたいと思います。お疲れさまでした。

	～午後 3 時 5 5 分閉会～
配付資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>○次 第 第 4 期寒川町まちづくり推進会議 第 3 回会議</li> <li>○資料 1 - 1 協働 P R チラシ (案 1)</li> <li>○資料 1 - 2 協働 P R チラシ (案 2)</li> <li>○資料 1 - 3 協働 P R チラシ (案 3)</li> <li>○資料 2 寒川町まちづくりに関するアンケート調査 (案)</li> <li>○資料 3 第 4 期寒川町まちづくり推進会議スケジュール (案)</li> </ul>
議事録承認委員及び 議事録確定年月日	大関委員、右城委員 (平成 2 7 年 3 月 6 日確定)